

※ 掛け物※

掛け物は、道具の中でもっとも重要視されるもので、茶会などで、道具を取り合わせるうえでも、その主題の中心になる。今日に伝わっているものの中から、その名品の数々をあげてみると、掛け物には、墨跡と呼ばれる禅宗の高僧の筆跡の軸物を始め、色紙、短冊、消息、唐画や古画、歴代の家元の字句や画賛などのものがある。

墨蹟 掛け物の中では、禅僧（特に臨済宗が中心）の書いたものを墨蹟と呼んで、もっとも大切に扱っている。この墨蹟の多くは、法語や詩文であり、深い心の境地を示したものであって、禅と特に関係の深い茶の湯で、人間性に強くひびくものがあるとして尊ばれてきたのである。今日伝わっている墨蹟のうち、もっとも古いものは、北宋の圓悟克勤（1063～1135）と言われている。中国の禅僧あるいは帰化僧のものが多い。また日本でも禅林中でも大燈国師や夢窓国師、一休宗純、春屋宗園などのものが珍重される。

懐紙 懐紙というのは、歌や詩を一枚の紙に書いたもので、もともと、その紙を懐中にしていたところからこの呼び名があり、平安朝からのものが、現在伝わっている。こうした懐紙の中では、熊野懐紙がもっともよく知られている。これは後鳥羽天皇が譲位

の後、二十数回も紀州熊野三山にご参拝になり、それらのときに、随行の侍臣とともに旅路で歌合わせを催されたときのものである。このほかにも西行、寂連などの入っている一品経和歌懐紙、秀吉のときの聚楽懐紙、後水尾天皇二条城行幸のおりの二条懐紙などが残っている。

古筆切れ 古い歌集や和漢朗詠集、歌合わせなどの断片を総称して、このように呼んでいる。古筆切れには、たとえば高野切れとか、本阿弥切れとか、石山切れなどと呼ばれているものがあるが、この切れの名は、伝来の呼び方でいたり、所持者の名前や書風の特徴であったり、いろいろである。

色紙 色紙という名前の起こりは唐時代に染紙から出たもので、日本でも奈良時代以降、正倉院御物などに見られる。しかしそれらはいずれも、これをついだ巻物としてであり、それが1枚の色紙として書かれるようになったのは室町時代以降のことである。これらの中には寸松庵色紙（伝紀貫之）、継色紙（伝小野小町）、小倉色紙（伝藤原定家）、また後陽成天皇、近衛信尹、本阿弥光悦のものなど、現在珍重されているものが多い。

短冊 短冊は懐紙を縦に切ったものが使われたのがはじまりで、鎌倉時代末期のころからあったといわれる。最も有名なものに、高野山金剛三昧院奉納の短冊がある。これには足利尊氏、足利直

義、頓阿、兼行、浄弁、慶雲、などの名がはいっている。このほかに僧侶や公家衆のものは、普通最後に署名があり、形も小さく、茶の湯には好んで使われる。また特殊なものとして、切紙（懐紙を方形にきったものや、扇面に書かれたものなどもある。

消息 消息とは、書簡や書状のことで、平安、鎌倉などの各時代の各流僧俗などのものをはじめとして、天正年間以後の、茶人の書状などが喜ばれる。利休の消息は、茶の湯では特に大切にされ、かなり多くのものが今日に伝えられている。またその子道安や少庵のものも、利休在りし日を忍ばせるものもあって、おもしろく、孫の宗旦は読みにくい字ではあるが、茶味があって喜ばれている。その他、豊太閤をはじめ、武将では、古田織部、細川三斎、小堀遠州などがあり、それぞれ一種独特の風格を見せている。特に、茶人の消息には、連歌とか、和歌、狂歌、俳句などが織込まれてありものも多く、茶の味をいっそう深く感じさせるものがあり、楽しめるものである。

絵画 茶室で使われる古い絵画では、第一に院体画があげられ、ほかに水墨画、絵巻物断簡、歌仙絵などがあげられる。

院体画 これは、中国の宋、元時代（十一～十三世紀）の官廷画家によって描かれた精密な線描画のことをよぶのであり、中でも花鳥山水などを描いたものが、古くはその最上とされていた。

水墨画 院体画のほかにも、宋時代には僧侶や文人たちによって墨の持つ端的な表現の中に、人間の心のあり方など、心の内面を求めようとする水墨画が発達した。その後日本でも水墨画が確立された。

絵巻物断簡 水墨画の持つ墨一色の神秘性に比べて、はなやかな大和絵巻物の断簡も、茶室には使われてきた。過去現在因果強絵巻とか、宇治物語絵巻、北野天神縁起などは、切られて床にかけられた。また、これらのほかに、宗達の下絵と光悦の書の歌巻なども、切って掛け物にされている。その他、歌の達人として崇拜された人物の画像に、その人の作になる歌一首を書き込んだ歌仙絵も、そのおちついた品位のゆえに使われることが多い。

一行、画賛など また一行、画賛などと呼んで、各時代の宗匠による字句や画賛、また、画家と茶人との合作によるものなども喜ばれ、掛け物として使われる。これらの字句は縦物と横物に大別される。